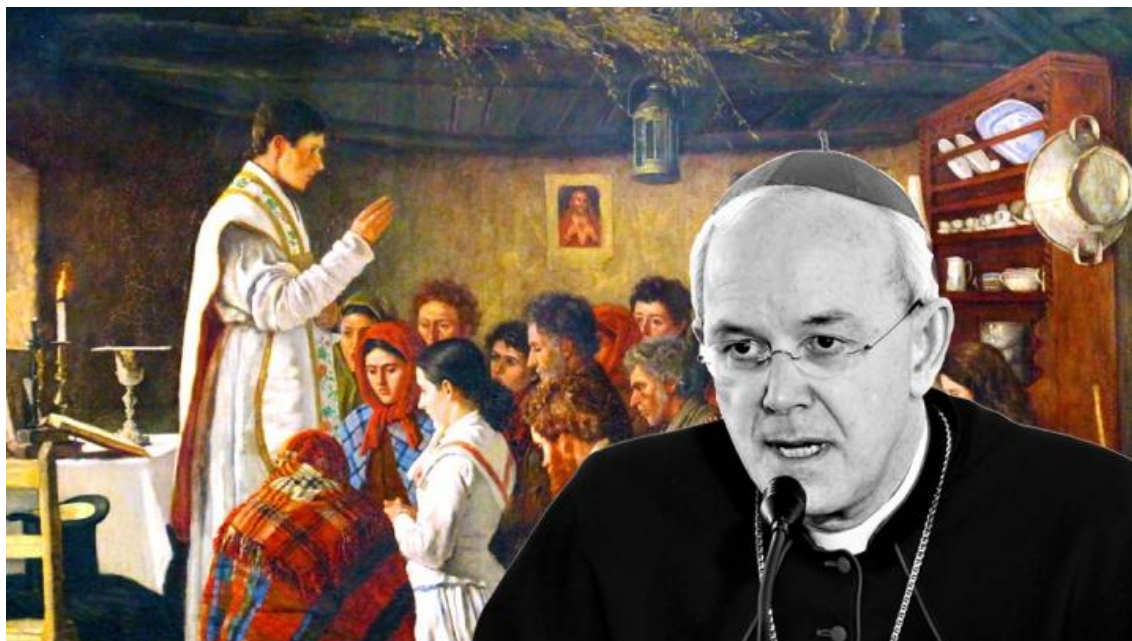


裏切られた伝統：『トラディチオニス・クストデス』について、ダイアン・モンターニャのシュナイダー司教へのインタビュー

ダイアン・モンターニャ



アタナシウス・シュナイダー司教は、教皇フランシスコが伝統的なラテン語ミサを制限する新たな教令『トラディチオニス・クストデス』を発表して以来、初めて紙面でのインタビューに応じ、この文書は千年の歴史を持つローマ典礼の典礼を「卑下」し、典礼を守るカトリック教徒に対して「不正」を行い、教会に「二つの階級社会」を生み出すものであると述べました。

シュナイダー司教は、「特権的な第一級は、改革された典礼を遵守する人々」であり、「これからやっと許容されるようになる第二級のカトリック教徒には、伝統的な典礼を通して、教会の現実と神秘を大きな精神的利益をもって経験した多くのカトリックの家族、子供、若者、司祭が含まれる」と主張しています。

また、司教は、自発教令とその添付書簡に示された「驚くほど偏狭な態度」と「軽蔑的な論調」は、現職のローマ教皇の指導方針とは「明らかに対照的」であるだけでなく、「多様性への開放」と典礼の「画一性」の拒絶という「公会議的」主張にも背を向けていると主張しています。

この独占インタビューの中で、カザフスタンのアスタナの補佐司教であるアタナシウス・シュナイダー司教は、この文書についての主な懸念を語り、伝統的なミサを捧げることを禁じられるかもしれないと恐れている神学生や若い司祭に助言を与え、教皇フランシスコが選んだ行動は、教皇聖ピオ五世が取った行動と類似しているという主張に言及しています。

また、伝統的なミサに与るカトリック教徒は、分裂の種をまき、第二バチカン公会議を否定しているという文書の不当な非難に対抗して、伝統的なミサに参加するカトリック教徒を擁護しています。伝統的なミサに参加する若いカトリック家族などの「かなりの部分」は、第二バチカン公会議や教会の政治に関する議論から「遠ざかっている」と司教は主張します。「彼らはただ、天主が彼らの心と人生に触れて変容された典礼形式で天主を礼拝したいのです。」

シュナイダー司教はまた、新たな措置に対応して信者を支援した司教職の兄弟たちを称賛し、新たな教令が最終的に「ブーメラン効果」をもたらすと確信していると述べています。世界中で伝統的なミサが「継続的に成長」していることは、「間違いなく聖霊の働きであり、現代の真のしるしである」と述べています。

そこで彼は、フランシスコ教皇と新しい施策を実行する責任者に、初期のキリスト教徒を迫害している人々に対するガマリエルの「賢明な進言」（使徒言行録 5・38-39）に耳を傾けることで、自分たちが「神に反対している」ことを見出さないようにすることを勧めています。

アタナシウス・シュナイダー司教へのインタビューの全文はこちらです。

ダイアン・モンターニャ：司教様、2021年7月16日に自発教令で発行された教皇フランシスコの新しい使徒的書簡は、『トラディチオニス・クストデス（伝統の守護者）』と呼ばれています。この題名が選ばれたことについて、最初の印象はいかがでしたか？

シュナイダー司教：私の最初の印象は、羊飼いが自分の羊の匂いを嗅ぐどころか、怒って棒で叩いているかのようでした。

自発教令と、それに添付して教皇フランシスコが世界の司教に宛てた書簡で、伝統的なラテン語ミサを制限する理由を説明していることについて、一般的な印象をお聞かせください。

教皇フランシスコは、その計画的な使徒的勧告『福音の喜び』の中で、「告知を受けやすくするための姿勢、つまり、親しく接する姿、対話へと開かれた心、忍耐、歓迎の心、裁かないこと¹」（165）を提唱しています。しかし、この新しい自発教令とそれに添付する書簡を読むと、逆の印象を受けます。つまり、この文書は全体として、司牧的な不寛容さや精神的な硬直性さえも示しているのです。この自発教令と書簡は、裁きと温かみのない精神を伝えています。『共同文書 世界平和と共生のための人類の兄弟愛』（2019年2月4日にアブダビで署名）では、教皇フランシスコは「宗教の多様性」を受け入れています。新しい「自発教令」では、ローマ典礼における典礼形式の多様性を断固として拒否しています。

教皇フランシスコの教義である「包括性」と「教会生活における少数派や周辺部の人々への優先的な愛」と比較して、この「自発教令」の姿勢は何と対照的なのでしょうか。そして、教皇フランシスコ自身の言葉とは対照的に、「自発教令」の中には、驚くべき狭量な姿勢が見出されます。「私たちは、多くの私たちの兄弟姉妹の夢と人生を切り離し、排除し、閉ざしている一方で、私たちを切り離し、排除し、閉ざす特権の論理を採用するよう、さまざまな形で誘惑されていることを知っています」（2016年12月31日、晩課での講話）。自発教令の新しい規範は、ローマ教会の祈りの法（lex orandi）の千年に渡る形式を卑下し、同時に、「非常に多くの」カトリック家庭、特に、伝統的な形式のミサ聖祭によって霊的生活やキリストと教会への愛が成長し、大きな恩恵を受けてきた若者や若い司祭たちの夢と生活を閉ざすものです。

自発教令は、新しく公布された典礼書は、ローマ典礼の祈りの法の唯一の[unica]表現であると述べることで、稀に見る典礼の排他性の原則を確立しています（第1条）。この立場も、教皇フランシスコのこの言葉とは何とも対照的です。「聖霊が教会にさまざまなカリスマをもたらすのは事実であり、それは一見すると無秩序を生み出すように見えるかもしれませんが。しかし、その導きの下で、それらは計り知れないほどの豊かさを構成しています。なぜなら、聖霊は一致の霊であり、それは画一化とは異なるからです」（2014年11月29日、イスタンブール）

¹ 教皇フランシスコ『使徒的勧告 福音の喜び』日本カトリック新福音化委員会訳・監修、カトリック中央協議会、2014年、p. 146.

ルのカトリック聖霊大聖堂での教皇フランシスコの説教)。

新しい文書についての最大の懸念は何でしょうか？

司教としての私の最大の懸念は、多様な本物の典礼形式の共存によってより大きな一致を育むのではなく、『自発教令』が教会の中に二階級の社会、すなわち第一級のカトリック教徒と第二級のカトリック教徒を生み出していることにあります。改革された典礼、すなわちノヴス・オルドを信奉する人たちが特権的な第一級であり、これからやっと許容されるであろう第二級のカトリック教徒には、ここ数十年、伝統的な典礼の中で育ち、以前の世代が神聖視し、歴史上多くの聖人や優れたカトリック教徒を育んだこの典礼形式のおかげで、教会の現実と神秘を大きな霊的利益とともに経験した多くのカトリックの家族、子どもたち、若者たち、司祭たちが含まれます。

この自発教令と付属書簡で、伝統的な典礼形式を守るすべてのカトリック教徒に対して、分裂的であるとか、第二バチカン公会議を否定しているという非難をすることで、不正を犯しています。実際には、これらのカトリック教徒のかんりの部分は、第二バチカン公会議や新しいミサ典礼 (Novus Ordo Missae) に関する教義上の議論や、教会の政治に関わるその他の問題から遠ざかっています。彼らはただ、天主が彼らの心と人生に触れ、変容された典礼形式で天主を礼拝したいのです。伝統的な典礼様式が分裂を生み、教会の統一を脅かすという、自発教令と書簡で唱えられている議論は、事実によって反証されています。さらに、これらの文書で伝統的な典礼形式を軽蔑するような口調で述べられていることから、公平な観察者であれば、このような議論は単なる口実や策略であり、ここでは何か別のことが行われていると結論づけることができるでしょう。

教皇フランシスコが (司教への書簡の中で) 自分の新しい措置を 1570 年に聖ピオ五世が採用したものと比較していることに、どれほどの説得力があると思いますか？

第二バチカン公会議といわゆる「公会議」教会の時代は、教会の典礼的实践における画一性の原則を否定すると同時に、精神性と地域の典礼表現の多様性と包括性に関わっていたことが特徴です。歴史を通じて、真の司牧的態度は、カトリック信仰の完全性、典礼形式の尊厳と神聖さを表現し、信者の生活の中で真の霊的実りをもたらすものであれば、多様な典礼形式に対して寛容と尊敬の

念を持つことでした。かつて、ローマ教会はその祈りの法の中で表現の多様性を認めていました。教皇ピオ五世は、トリエント典礼を公布する使徒的憲章『クオー・プリームム』（1570年）の中で、二百年以上前のローマ教会の典礼表現をすべて承認することで、それらをローマ教会の祈りの法の中で同等に価値のある正当な表現として認めました。教皇ピオ五世はこの勅書の中で、ローマ教会内の他の正当な典礼表現を決して取り消すものではないと述べています。パウロ六世の改革まで有効であったローマ教会の典礼形式は、ピオ五世の時に生まれたものではなく、トリエント公会議の何世紀も前から実質的には変わっていませんでした。両ミサ典礼のミサの順序はほぼ同じであり、違いは暦、序唱の数、より正確なルブリカの規範などの副次的な要素にあります。

教皇フランシスコの新しい自発教令は、約千年の歴史を持つカトリック教会の典礼形式を差別する態度を示している点でも、深く憂慮すべきものです。教会は、何世紀にもわたって、神聖さ、教義の正確さ、精神的な豊かさを表現し、多くの教皇、偉大な神学者（聖トマス・アクィナスなど）、多くの聖人たちによって高く評価されてきたものを否定したことはありません。西欧、一部は東欧、北欧、南欧、アメリカ、アフリカ、アジアの人々は、伝統的なローマ典礼によって伝道され、教義的、精神的に養成され、これらの人々はその典礼の中に霊的、典礼的な故郷を見出しました。教皇ヨハネ・パウロ二世は、伝統的なミサの形式を心から評価している例として、次のように述べています。「聖ピオ五世の」と呼ばれるローマ・ミサ典書には、東方の様々な典礼と同様に、司祭が聖なる神秘の前で最も深い謙遜と畏敬の念を表現する美しい祈りがあり、それはあらゆる典礼の本質を明らかにするものです」（2001年9月21日、典礼秘跡省総会参加者へのメッセージ）。

今、この典礼形式を軽蔑し、「分裂的なもの」、「教会の統一にとって危険なもの」とレッテルを貼り、やがてこの形式を消滅させることを目的とした規範を発行することは、あらゆる時代の教会の真の精神に反するものです。教皇フランシスコの自発教令に盛り込まれた規範は、多くのカトリック教徒の霊魂といのちから、それ自体が聖なるものであり、これらのカトリック教徒の精神的な故郷を代表する伝統的な典礼を無慈悲にも引き剥がそうとするものです。この自発教令によって、今日、母なる聖教会の伝統的な典礼によって霊的に養われ、養成されてきたカトリック教徒は、もはや教会を母としてではなく、教皇フランシスコ自身の表現と一致する「継母」として経験することになります。「批判したり、自分の子供の悪口を言う母親は、母親ではありません。イタリア語で「継母」と言うのではないのでしょうか…彼女は母親ではありません」（2015年5月

16日、ローマ司教区の奉献された男女への演説)

教皇フランシスコの使徒的書簡は、特に司祭のために祈るカルメル会（リジューの聖テレーズなど）の守護者であるカルメル山の聖母の祝日に出されたものです。今回の措置を受けて、伝統的なラテン語ミサを捧げることを望んでいた教区の神学生や若い司祭たちに、どのような言葉を掛けられますか？

ラッツィンガー枢機卿は、典礼に関する教皇の権限の制限について、次のような明快な説明をしています。「教皇は自分の意思を法とする絶対的な君主ではなく、むしろ正統な伝統の守護者であり、それゆえに従順さの第一の保証者でもあるのです。教皇は自分の好きなようにはできないので、思いついたことを何でもやろうとする人々に対抗することができるのです。その支配は、恣意的な権力ではなく、信仰に基づく従順の支配です。だからこそ、典礼に関しては、教皇は庭師の仕事をしているのであって、新しい機械を作って古い機械をガラクタの山に捨てる技術者の仕事をしているわけではありません。教会の信仰と生活の中で熟成された司式と祈りの形式である「典礼」は、生きた伝統の凝縮された形であり、その典礼を用いる領域は、その信仰と祈りの全体を表現することになります。このように、典礼は教会に与えられる有益なものであり、パラドシス（伝統の継承）の生きた形なのです」（『典礼の有機的発展：典礼改革の原則と、第二バチカン公会議以前の20世紀の典礼運動との関係』ドム・アルクイン・リード著、サンフランシスコ 2004年²への序文）。

伝統的なミサは、少なくとも千年以上前から司祭や聖人たちによって祝われ、深く評価され、愛されてきたので、教会全体に属する宝物です。実際、伝統的なミサの形式は、1570年に教皇ピオ五世のミサ典書が出版される何世紀も前から、ほとんど同じものでした。千年近く前の有効で高い評価を受けている典礼の宝物は、教皇一人が自由に処分できる私物ではありません。ですから、神学生や若い司祭は、この教会の共通の宝物を用いる権利を求めなければなりません。そして、もしその権利が否定されたとしても、おそらく秘密の方法で用いることができます。これは不服従の行為ではなく、この典礼の宝物を与えてくれた母なる聖教会への従順の行為です。教皇フランシスコが千年近い歴史を持つ典礼の形式を断固として拒否したことは、教会の不変の精神と実践に比べれば、実際には短命な現象に過ぎません。

²英語の題名: "The Organic Development of the Liturgy. The Principles of Liturgical Reform and Their Relation to the Twentieth-century Liturgical Movement Prior to the Second Vatican Council" by Dom Alcuin Reid, San Francisco 2004.

司教様、『トラディチオニス・クストデス』の実施について、これまでどのような印象をお持ちですか？

わずか数日のうちに、教区司教、さらには司教会議全体が、伝統的な形式のミサ聖祭を捧げることを組織的に弾圧し始めました。これらの新しい「典礼査問委員」は、教皇フランシスコが述べ、嘆いたことと同様の、驚くほど厳格な聖職者主義を示しています。「教会には聖職者主義の精神があり、聖職者は自分が優位に立っていると感じ、人々から目をそらし、聖職者はいつも『これはああで、こうで、こうするのだ。そして、おまえは出ていけ！』と言うと人は感じます」。(2016年12月13日からのミサ聖祭での日々の黙想。)

教皇フランシスコの反伝統的な自発教令は、1652年から1666年にかけてモスクワ総主教ニーコンの下で、ロシア正教会が行った重大で極めて厳格な典礼の決定といくつかの共通点があります。これは最終的に、ニーコン総主教の改革以前のロシア教会の典礼と儀式の慣習を維持する「古儀式派」(ロシア語ではstaroobryadtsy)として知られる永続的な分裂につながりました。1666年から1667年にかけてのシノドスで、この古儀式派たちは、ロシアの信心深さをギリシャ正教の現代的な礼拝様式に合わせることに抵抗し、その儀式とともに追放され、古儀式派と、古儀式を非難する国の教会に従う者たちとの間に分裂が生じました。もし、ニーコン総主教が実施した規範が真に司牧的なものであり、古儀式の使用を認めるものであったならば、何世紀にもわたる分裂は起こらず、多くの不要で残酷な苦しみを味わうこともなかったでしょう

現代では、ミサ聖祭が、同性愛という罪深い生活様式を促進する場となっているのを目の当たりにしています。「LGBT ミサ」と呼ばれるこの表現は、それ自体が神への冒瀆です。このようなミサは、ローマ教皇庁や多くの司教によって容認されています。緊急に必要とされるのは、「LGBT ミサ」のような実践を、厳格な規範をもって抑制する自発教令です。なぜなら、このような「LGBT ミサ」は、天主の威厳に対する侮辱であり、信仰者(小さき者たち)に対する不祥事であり、そのような祭儀によって罪を追認され、それによって永遠の救いが危険にさらされている性的に活発な同性愛者に対する不正であるからです。

しかし、アメリカをはじめ、フランスなどでは、伝統的なラテン語ミサにこだわる教区の信者を支持する司教も少なくありません。このような兄弟の司教たちを励ますために、あなたは何とおっしゃいますか？また、この文書に驚いた司教たちに対して、信者たちはどのような態度をとるべきでしょうか？

これらの司教たちは、「羊の匂いがする羊飼い」として、真の使徒的・司牧的態度を示しています。私は、これらの司教たちや他の多くの司教たちに、このような崇高な司牧的態度を続けるように勧めたいと思います。人の称賛や人の恐れに動かされることなく、ただ天主のより大きな栄光と、靈魂のより大きな靈的利益と、その永遠の救いのために。信者たちは、このような司教たちに対して、感謝と親愛の念をもって接しなければなりません。

この自発教令はどのような効果をもたらすと思われますか？

教皇フランシスコの新しい自発教令は、最終的にはピュロスの勝利（割の合わない勝利）であり、ブーメラン効果をもたらすでしょう。伝統的なミサに参加している多くのカトリック家庭や増え続ける若者や司祭一特に若い司祭は—このような極端な行政行為によって良心が侵害されることを許すことはできないでしょう。このような信仰者や司祭たちに、彼らはこれらの規範にただ従わなければならないと告げても、結局彼らには通用しないでしょう。なぜなら、ローマ教会の偉大な典礼の宝庫である伝統的な典礼の形式を抑圧することが目的である場合、従順さを求める呼びかけはその効力を失うことを彼らは理解しているからです。

やがて、緊急事態や迫害の時代に起こるように、世界的なカタコンベ・ミサの連鎖が必ず起こるでしょう。アロイシウス・オケリーが『刑罰法時代の（アイルランドの）コネマラでのミサ (Mass in Connemara (Ireland) during Penal Times)』という絵で印象的に描いたような、伝統的なミサが密かに行われる時代が来るかもしれません。あるいは、4世紀に伝統的なカトリック教徒が自由主義的なアリウス派の司教団に迫害されたときに、大バジリオが描いたような時代を生きることになるかもしれません。聖バジリオは次のように書いています。「真の信者の口は閉ざされ、あらゆる冒瀆的な舌が自由に動き回り、聖なるものは足で踏みにつられ、優れた信徒は教会を不敬の学校として避け、砂漠では天の主に向かってため息と涙を流しながら手を挙げています。あなたでさえも、私たちのほとんどの都市で起こっていることを聞いたことがあるでしょう。妻子を連れた人々や老人までもが城壁の前に流れ出て、屋外で祈りをささげ、天候の不便さを我慢して、主の御助けを待っているのです」（書簡 92）。

伝統的なミサの形式が、世界のほとんどすべての国で、最も遠く離れた地でも、見事に、調和的に、極めて自然に広がり、継続的に成長していることは、間違いなく聖霊の働きであり、現代の真のしるしであると言えます。典礼司式のこ

の形式は、特に若者やカトリック教会への改宗者の生活の中で、真の霊的な実りをもたらします。なぜなら、後者の多くは、まさにこの教会の宝の照射力によってカトリックの信仰に惹かれたからです。教皇フランシスコをはじめとする司教たちは、ガマリエルの賢明な進言を真剣に検討し、自分たちが実際に神の働きと戦っているのかどうかを自問すべきです。「もしあの計画や業が人間から出たものなら、自滅するでしょう。しかし、もしそれが神から出たものなら、あの者たちを滅ぼすことはできないでしょう。まかり間違うと、諸君は神を敵に回す者となるかもしれません」(使徒言行録 5・38-39)とあります。教皇フランシスコが、自分の思い切った悲劇的な行為を永遠への視野と共に再考し、自らの言葉を思い起こしながら、勇気をもって謙虚にこの新しい自発教令を撤回してくださいませように。「真実、教会は、聖霊を支配したり飼いならしたりしようとしなない限りにおいて、聖霊への忠誠を示すのです」。(2014年11月29日、イスタンブールのカトリック聖霊大聖堂での説教)

当面の間ですが、全大陸の多くのカトリックの家族、若者、司祭たちは今、泣いています。彼らの霊的な父である教皇が、彼らの信仰と神、母なる聖教会、使徒座への愛を大いに強めてきた伝統的なミサの霊的な栄養を奪ってしまったからです。彼らは、ひとまず「種を携え、泣きながら出て行く者」であり、「束を携え、喜びながら帰ってくる」(詩篇 126・6) かもしれません。

これらの家族、若者、司祭たちは、教皇フランシスコにこのような言葉をかけることができます。「至聖なる父よ、教会の偉大な典礼の宝を私たちに返してください。私たちを二流の子供として扱わないでください。多様性、司牧的付き添い、良心の尊重の必要性を常に全世界に宣言してきたあなたが、単一の排他的な典礼形式を強要することで、私たちの良心を侵害しないでください。このような無慈悲な行為を行うように助言した厳格な聖職者主義の代表者たちに耳を傾けてはなりません。新しいものと古いものとを、自分の倉から取り出す」(マタイ 13・52) 真の家庭の父となってください。もしあなたが私たちの声に耳を傾けてくださるなら、あなたが天主の御前で裁かれる日に、私たちはあなたの最高の執り成し手となるでしょう。」